



TITLE:

# <研究論文(原著論文)>意識経験の現象的統一:表象主義的アプローチとその問題

AUTHOR(S):

太田, 紘史; 佐金, 武

---

CITATION:

太田, 紘史 ...[et al]. <研究論文(原著論文)>意識経験の現象的統一:表象主義的アプローチとその問題. Contemporary and Applied Philosophy 2011, 3: 1-27

ISSUE DATE:

2011-10-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/158371>

RIGHT:

# 意識経験の現象的統一： 表象主義的アプローチとその問題\*

太田紘史，佐金武†

## 概要

In this study, we will examine the “unity of consciousness,” focusing on its phenomenological aspect: the “phenomenal unity.” Although we agree with the representationalist idea of unity, we will argue that we should be neutral on the individuation of phenomenally unified experiences. In addition, we will point out that the representationalist idea is incompatible with the idea concerning consciousness that has been recently suggested by functionalists. We will consider two options for this problem: one is to abandon the functionalist idea and another is to deny a phenomenologically plausible thesis about unity. Each option has significant implications on understanding certain empirical studies such as the split-brain syndrome.

Keywords: unity of consciousness, representationalism, functionalism, split-brain syndrome

## 1 意識の統一をめぐる問い

我々の意識経験において、その内容は一体のものとして現れる。複数の楽器が奏でるシンフォニーに耳を傾けるとき、我々はそれを構成する一つ一つの音を別々に聴いているのではない。また自転車に乗るときには、自らが働かせる視覚と聴覚、そして運動感覚がひとまとまりのものとして経験される。このように、我々の意識にのぼる様々な事柄は、通常(あるいは常に)、一つのまとまりをなしているように思われる。これは意識の統一と呼ばれるようなものだ。だが、それを一体どのように特徴づければよいのだろうか。そして意識の統一は、どのように説明されるのだろうか。本論において我々は、共時的な意識経験に焦点を絞り、これらの問題を理論的に考察したい。

2節では、意識の統一の様々な特徴づけを網羅的に検討し、我々が本稿で焦点を当てる現象的統一

---

\* CAP Vol. 3 (2011) pp. 1-27. 受理日: 2011.2.17 採用日: 2011.6.2 採用カテゴリ: 研究論文 掲載日: 2011.10.12.

† 二人の著者はこの論文の執筆に等しく貢献している。

を描き出す。3節では、この現象的統一を説明する理論的アプローチとしてBayne & Chalmers(2003)の包摂によるモデルとDainton(2000/2006)の共-意識によるモデルを紹介し、それらの中心的主張をBCDモデルとして統合する。4節では、これと全面的に対立するアプローチとして、Tye(2003)が提唱する表象主義的な現象的統一の説明を紹介し、その中心的主張をTモデルとして描く。5節では、表象主義のアイデアの根幹をなす、経験そのものと経験内容の区別を徹底し、BCDモデルとTモデルで争われている論点の一つ(経験そのものの複合性あるいは一性をめぐる争点)に対して、表象主義は中立であってよいと論じる。6節では、現象的統一の表象主義的な理解のもとでは、ある現象学的主張と機能主義的主張が不整合となり、いずれかが放棄されなければならないことを指摘するとともに、その含意を検討する。

## 2 意識の統一の様々な特徴づけ

私の目の前にあるこのリンゴの赤さとその丸さは、私の視覚経験において統一されている。またそれだけではなく、私の視覚の質と聴覚の質も一体となって私の経験に現れているように思われる。一般に、ある時点のある主体の意識に様々な経験が与えられているとき、それらは何らかのまとまりを持つ。意識の現象的特性はしばしば、「その経験を持つとはどのようなことか」として特徴づけられるが、これは意識の統一の特徴づけのために拡張することができる。意識の統一は、それらの経験をともに持つとはどのようなことかという観点から特徴づけることができる。これが、現象的統一と呼ばれるものである。

だが統一について、このようなものとは違った理解があることは確かだろう。そこで、意識の統一を捉えようとするいくつかの概念を、ここで列挙し検討しよう。それらの概念で理解される意識の側面それぞれは、統一と呼ばれるに値するものかもしれない。だが、意識の統一があると思しき状況に、そういった側面が必ず伴うかどうかは明らかではない。実際これから検討するものは、対象的統一(2.2節)、空間的統一(2.3節)、規範的統一(2.4節)、内観的統一(2.5節)の概念であるが、これらの概念で理解されるものをはみ出すような仕方での統一があると我々は考える。それゆえこういった概念は、統一を必要十分な仕方の特徴づけない。むしろ統一の必要十分な特徴づけとなるのは、現象的統一である(2.6節)。ただしこれらの検討の前に、主体的統一という概念を検討しておこう。

### 2.1 主体的統一

私の現在の全経験は統一されている。なぜなら、それらはすべて私の経験だからだ。このような考えには、どこか直観に訴えるものがある。これは**主体的統一(subject unity)**として、次のように定義できる。すなわち、複数の意識経験が主体的に統一されているのは、それらが同じ時点の同じ主体に属するときだ(Tye, 2003, 12; Bayne & Chalmers, 2003, 26)。さて、この主体的統一は、意識の統一についての必要十分かつ実質的な特徴づけと言えるだろうか。

意識の統一を主体的統一によって特徴づけることには、少なくとも二つ問題があると思われる。

第一の問題は、この特徴づけがトリビアルに思われることである。もしも主体というものを、一連の経験がともに属している存在者として理解するならば、主体概念はすでに統一の概念を含んでしまっている。

そうならば、経験の統一の本性は主体的統一であるという主張はトリビアルに真である<sup>\*1</sup>。そうならば、これは統一の実質的な特徴づけにはならない。

第二に、主体的統一のアプローチは、我々が現象学的考察に徹する限り、ヒューム以来の伝統的な困難に突き当たる。私の意識の内部を見る限り、そこに現れる様々な経験をまとめあげる「私」という主体は登場しない。それゆえ、統一を担う主体をどのようなものとして理解すればよいのか、明らかではない。

私という主体を前提とすることなく統一を特徴づけることができれば、次はそれを礎に、意識主体とは何かを捉え直す契機にもなるかもしれない。我々はその可能性を排除しないが、少なくとも統一を特徴づけるための出発点として主体に訴えることは、上記のような問題のために避けられたほうがよいだろう。

## 2.2 対象的統一

私がリンゴを見ながらそれに触るとき、赤さの感じと表面の感触がともに私の意識経験に現れている。これらの視覚経験と触覚経験は、それらが同じ対象についての経験であるという意味で統一されているとすることができるかもしれない。このような統一は、例えば視覚経験だけに限ってもよくあることだ。私がリンゴを見ると、その色だけでなく形も私の意識に現れているはずである。そして、この色の経験と形の経験もまた、それらが同一の対象についての経験であるという仕方で深く結びついているように思われる。これが**対象的統一(objectual unity)**である。一般的に言えば、複数の意識経験が対象的に統一されているのは、それらにおいて経験されているものが同一の対象のものとして経験されるときだ(Tye, 2003, 12; Bayne & Chalmers, 2003, 25)。

だが、意識の統一は対象的統一に限られるわけではないだろう。というのも我々は、対象的に統一されない経験の間にも統一を見いだすことができるからだ。例えば、私が赤いリンゴを見ながら友人の発話を聞いているとき、私の視覚経験(赤や形の視覚経験)はそのリンゴに向けられているのに対して、聴覚経験(発話されている音の聴覚経験)は友人(の発話)に向けられている。つまり、私の視覚経験は、聴覚経験と対象的に統一されているとは言えない。だがそれでも視覚経験と聴覚経験は、私の意識において一体のものとなって現れているように思われる。それゆえ対象的統一は一般に意識の統一にとって必要ではないと考えられる。

## 2.3 空間的統一

上の例に見たように、私が赤いリンゴを見ながら友人の発話を聞いているとき、その視覚経験と聴覚経験は対象的には統一されていない。だがそれらは何か別の意味で統一されているように思われる。そこで、我々は**空間的統一(spatial unity)**という考えに訴えることができるかもしれない。一般に、複数の意識経験が空間的に統一されているのは、それらの対象が同一の空間に属するものとして経験されるときである(Tye, 2003, 12; Bayne & Chalmers, 2003, 25)。上の例における私の視覚経験と聴覚経験は、空間的に統一されていると言えるかもしれない。

---

<sup>\*1</sup> C.f. Bayne & Chalmers(2003, 26).

だが空間的統一もまた、意識の統一の一側面を捉えているにすぎない。というのも、空間的に統一されない経験の間にも統一を見いだすことができるからだ。例えば、私が赤いリンゴを見ながら、別の場所に緑のリンゴが置いてあるのをイメージするでしょう。これら視覚経験と視覚イメージ経験は、共通する空間的内容をもたない。また例えば、リンゴを見ながら憂鬱を経験することや(気分経験)、音楽を聞きながら命題論理の証明を行なうこと(思考経験)も可能だろう<sup>\*2</sup>。気分経験や思考経験は空間的内容を持たないが、それでもこれらの事例において視覚経験や聴覚経験と統一されている。仮にそれらの経験に空間的内容が何かあるとしても、それが他の経験と共通する空間的内容を持つようには思われない。

さらに、Dainton(2000, 69-70)は次のような思考実験を提案する。脳を実験室に固定し、それと一連の感覚器官を遠隔的に接続し、それら感覚器官を任意の場所に置くことができるでしょう。ここで視覚と聴覚の感覚器官を山のうえに置き、そして身体感覚の感覚器官を海の中に沈めるのだでしょう。するとこの脳にとって、視覚や聴覚で周囲の空間が経験される仕方と、身体感覚で周囲の空間が経験される仕方は、著しく乖離したものになるだろう。そうDaintonは予測する。つまりこのストーリーでは、その脳は空間的内容の異なる複数の感覚を同時に経験している。

こういった事例のうち一つでも認められるならば、空間的統一がないからといって、意識の統一がないとは限らないことになる。むしろ、空間的統一なしの意識の統一があり、それゆえ空間的統一は意識の統一にとって必要ではない。

## 2.4 規範的統一

一連の経験内容は通常、整合的であるように思われる。例えば、三つの物体A, B, Cが左から順番に並んでいるのを見るとしよう。このとき、AがBの左にあり、BがCの左にあり、AがCの左にあるように見える。しかし、同じ順番に並べられたこれら三つの物体を見ると、AがBの左にあり、BがCの左にあり、なおかつAがCの右にあるように見えることは通常ない。これに着目して、意識の統一はその整合性の観点から捉えられると示唆されるかもしれない。これは**規範的統一**(normative unity)と呼ばれる(Bayne & Chalmers, 2003, 27; Bayne, 2007, 202)。一般に、複数の意識経験が規範的に統一されているのは、それらの内容が整合的であるときである。

だが、規範的統一は意識の統一を尽くしてはいない。なぜなら、統一された意識経験が必ず整合的であるとは限らないからだ。

例えば第一に、不可能図形(例えばエッシャーの『滝』)を見るような経験では、その諸部分がともに一つの視野のなかに現れるが、全体としての内容には明らかな不整合性がある<sup>\*3</sup>。また第二に「滝の錯視」では、視覚において対象の静止と運動が経験される。このように、感覚様相内の不整合な内容の経験が可能だと思われる。また第三に、感覚様相間の不整合性も可能だと思われる。逆メガネをかけたときの視覚経験と身体感覚経験は、互いに不整合な内容を持ちながらも(ある対象が上にあるのか下にあるの

<sup>\*2</sup> C.f. Bayne & Chalmers(2003, 26).

<sup>\*3</sup> C.f. Tye(2003, 38).

か), それでも統一した仕方で経験されていると言える<sup>\*4</sup>。そして第四に, 非感覚的な経験においても不整合性は見られる。例えば自分の欲求に葛藤を覚えるとき, その主体はあることを意識的に欲すると同時に, その否定をも意識的に欲するということが起きている。これらの欲求は互いに矛盾するが, まさにその二つが意識のうちに同時に現れてしまっている。これらのうち一つの事例でも認めるならば, 意識の統一に規範的統一は必要ないと結論づけられる。

## 2.5 内観的統一

私は知覚的な質に対して, 対象の持つ質として注意を向けることができる。他方で私は知覚的な質に対して, 私の知覚の質として注意を向けることもできる。例えば, 普段我々は目を閉じたときの見えの感じには注意を向けないが, 目を閉じた直後に残像がチカチカするよう感じられることに注意を向けることができ, これを自身の視覚の質と見なすことができる。また例えば, 普段我々は, 首の後ろ側にシャツが触れている感じに注意を向けることをほとんどしないが, それに注意を向けてかすかな痒みの感じを見つけることができ, これを自身の身体感覚の質と認めることもできる。様々な注意作用のうち, こういったものを特に内観的注意と呼ぶことにする。

私が内観的注意を働かせるとき, 私は自分の経験内容がともに与えられていることに気づくことができる。すなわち, 私は自分の様々な感覚器官から得られた経験内容を同時に内観的注意の対象とし, それらの経験が統一されていることに気づく。例えば私は上記のように, 目を閉じたときの残像に注意を向けることと, 首の後ろ側の感じに注意を向けることを同時に行い, これらの質のいずれをも自分の感覚の質と見なすことができる。ここには, ある意味で意識の統一があると言えそうだ。これが**内観的統一** (introspective unity)である(Tye, 2003, 13)。複数の意識経験が内観的に統一されているのは, それらの内容がともに単一の内観的注意の遂行の対象となっているときである。

だが内観的統一もまた, 意識の統一を部分的にしか捉えていない。なぜなら, 内観的統一がないところでも, 意識の統一は保持されうるからである。私が赤いリンゴを見ながら友人の発話を聞くとき, そのリンゴの赤さの視覚経験と友人の発話の聴覚経験の両方を持つことができる。そして, 内観的注意はリンゴの赤さに向いていながら, 私は友人の発話を通常通りの仕方で聞き理解していることがありうる。したがって, 諸々の経験をともに持つために内観的注意が必要であるわけではないと思われる<sup>\*5</sup>。

<sup>\*4</sup> C.f. Bayne(2007, 203).

<sup>\*5</sup> もっとも, 現実的に内観を行なうということだけでなく, 内観可能ということまで含めて, 内観的統一を定義するならば, 上の反例は成り立たない。というのも, 友人の発話とリンゴの赤さという二つの経験はどちらも, 内観可能なものとして統一されていると論じることができるかもしれないからだ。だがこの考えに対しては少なくとも二種類の懸念がある。第一に, 仮に友人の発話(聴覚経験)とリンゴの赤さ(視覚経験)という二つの経験をともに内観することはできても, 他の感覚様相すべての経験について一斉に内観的な注意を向けることが可能であるとは思われない。第二に, 内観というメタ認知的な能力を持たない生物においても(例えばヒト以外の高等霊長類など), その視覚経験や聴覚経験はともに経験されていると思われる。

## 2.6 現象的統一

以上から示唆されるのは、これまでに見た特徴づけでは、意識の統一をせいぜい部分的にしか捉えられないということだ。そこで我々はむしろ、以下のような統一の理解に従いたい。意識経験の現象的特性はしばしば、ある経験を持つとはどのようなことか(*what it is like to have an experience*)として特徴づけられる(Nagel, 1974)。この考えを拡張し、現象的特性が私の意識経験において一体となって現れているさま、すなわち**現象的統一**(*phenomenal unity*)を次のように特徴づけることができる——複数の意識経験が現象的に統一されているのは、それらをともに持つとはどのようなことか(*what it is like to have experiences together*)といったものがあることである。つまりそれは、意識の現象的な側面における統一である(Tye, 2003, 13-15; Bayne & Chalmers, 2003, 29)。一例として、次のような状況を考えてみよう。私があるとき音楽を聞き、また別のときに読書をするという場合、私はこれら二つの経験を持っていたとは言えるだろうが、それらをともに経験したわけではない。これに対し、私が音楽を聞きながら本を読んだとき、私は音楽の聴覚経験と文字列の視覚経験をともに持っていたと言える。この違いが、意識経験の現象的統一の有無を示唆する<sup>\*6\*7</sup>。

現象的統一は、意識の統一を明確化するうえで最も成功している特徴づけだと我々は考える。実際、現象的統一は、意識の統一と呼ばれる状況において常に観察される。

例えば、(2.2節で見たような)色経験と形経験が対象的に統一される状況では、それら視覚的特徴は(特定対象に属するものとして)ともに経験されている。さらに、こういった対象的統一が見られないが統一と呼ぶべき状況をも、現象的統一の概念は適切に捉える。リンゴを見ながら友人の発話を聞くとき、視覚経験と聴覚経験は対象的に統一されていないが、それでも統一されていると言うべきである。この統一は、視覚経験と聴覚経験をともに持つような何かがある、といった仕方で特徴づけることができる。

また例えば(2.3節で見たような)視覚経験と聴覚経験が空間的に統一される状況では、それらの視覚的対象と聴覚的対象が(空間的属性のもとで)ともに経験されている。さらに、空間的統一が見られないが統一と呼ぶべき状況をも、現象的統一の概念は適切に捉える。視覚経験と気分経験と思考経験には、共通する空間的内容はないものの、それらの経験をともに持つとはいかなることかといったものがあり、これは各経験を単独で持つときにはないようなものである。(同様のことは、規範的統一や内観的統一に関しても言える。)

しかし現象的統一は、主体的統一と同様、意識の統一についてのトリビアルな特徴づけにすぎないという批判がなされるかもしれない。ある時点のある主体に様々な経験が与えられているとき、それらが現

<sup>\*6</sup> ただしこのことは、音楽を聴くという聴覚経験が、本にある文字列の視覚経験に質的に影響を及ぼすということではない。マイルス・デイヴィスのレコードを聴くという聴覚経験がある場合もない場合も、村上春樹の『1Q84』に書かれた文字列の視覚経験は質的に同じである。もともと、ある経験の質が、それを含む全体としての経験の質によって影響を及ぼされる、ゲシュタルト的な結びつきもある。カニツァーの三角形はその典型例だろう。しかし、このような例は限定的で、現象的統一をゲシュタルト的な結びつきと同一視するべきではない(C.f. Dainton, 2000/2006, ch.8-9)。

<sup>\*7</sup> ここでの特徴づけは、現象的統一が何らかの関係の性質であるということを含意しない。実際著者らは、そういった関係の性質なしの統一として現象的統一を提案する。これについては5.4で詳しく論じる。

象的に統一されている(すなわち、それらをともに持つとはいかなることかといったものがある)というのは、単なる論理的真理にすぎないのではないか。そう思われるかもしれない。

現象的統一が崩壊しないと考えるのは一見もっともらしい。だがそれは実際には明らかではない。ここで、分離脳についての興味深い事例を紹介しよう。分離脳手術を受けた患者は、異なる視覚刺激を右視野と左視野に与えられるとき、それら二つの視覚情報の統合を要する行動反応を示せないことがある。この事態を解釈する方法の一つは、分離脳患者の意識は現象的側面において統一されていないと考えることだろう。すなわち、患者の意識には様々な経験が同時に与えられているが、そのうち右視野の視覚経験と左視野の視覚経験はなぜか統一されず、患者はそれらをともに持つことができていないのかもしれない。そのように考えるなら、分離脳の事例は現象的統一の崩壊を示していることになる。我々はこれが唯一の解釈だとは思わないが、様々な解釈が成り立つことからして、現象的統一がどこで崩壊するかという問いが有意味だと言えるのは間違いない。それゆえ現象的統一は、複数の経験を持つということから自動的に帰結してしまうようなトリビアルな特徴づけではない。(なお分離脳については、現象的統一の理論的考察を試みた後に、6節で改めて検討するつもりである。)

さて、このような現象的統一は、どのような形でその本性を理論的に理解できるだろうか。それには大きく分けて二通りのアプローチがある。一つは、現象的に統一された経験の間には何か特殊な関係が成り立っており、それによって全体としての経験が構成されるという説明である。もう一つは、経験と経験内容を明確に区別したうえで、現象的統一を後者の属性として理解し、複数の経験から全体的な経験が構成されることはないとする説明である。我々は、3節で前者のアプローチを解説し、4節で後者のアプローチを見ることにする。その後我々は5節で、後者のアプローチに見られる表象主義な部分を支持しつつも、両陣営の間に不必要な係争点が生じていることを指摘する。

### 3 経験間関係としての現象的統一:BCD モデル

Bayne & Chalmers(2003)とDainton(2000/2006)はそれぞれ異なる理論を背景に、結果としてはよく似た現象的統一の説明を与えている。これら二つの説明に共通するのは、現象的に統一された経験の間には特殊な関係が成り立っており、それによって全体としての経験が構成されるという考えである。そしてまた、これを逆に見れば、全体としての経験はそれを構成する要素的な経験を部分に持つということになる。以下、これらの考えを順に説明しよう。

Bayne & Chalmers(2003)(以下B&C)によれば、現象的統一は「包摂(subsumption)」という観点から理解することができる。複数の経験が現象的に統一されるという場合、それらがより大きな経験によって包摂されるということが起きている。すなわち、複数の経験が現象的に統一されているのは、それらを包摂する経験が存在するときかつそのときに限る。

例えば、ある意識主体において、色の視覚経験は形の視覚経験とともにより包括的な視覚経験によって包摂されることで統一される。さらにまた、その視覚経験は聴覚経験とともに、より包括的な経験(視聴覚経験)によって包摂されることで統一される。このような包摂が入れ子状に繰り返されて、最終的に主体



の様々な意識的状态すべてを部分として包摂する単一の経験へと統一される。

B&Cの考えは直観的に理解しやすい。ある主体の全体としての意識経験は、視覚経験、聴覚経験、味覚経験、嗅覚経験、身体感覚経験、情動経験、思考経験といった様々な種類の経験から構成されており、つまり意識経験には複合的構造があるように思われる。また、一つの視覚経験には色と形のような様々な要素があるといった具合に、一種類の様相に限ってもそのような複合的構造があるように思われる。このように、B&Cの理論に従えば、「ともにより大きな経験の要素である」というものとして統一を理解することができる。

Dainton(2000/2006)もまた、B&Cと同様に、経験は複合的構造を持つと考える。ただしDaintonによればこの複合的構造は、経験の間に成り立つ「共-意識(co-consciousness)」という関係によるものである。共-意識は次のように定義される——複数の経験の間に共-意識の関係が成り立つのは、それらがともに経験されるときかつそのときに限る。これは現象的統一に他ならないが、Daintonの提案は、それが他でもなく経験間に成り立つ関係性であるというものである。

Dainton(2006, Postscript)とBayne(2005)によれば、包摂の理論と共-意識の理論は相補的なアプローチであり、そこに視点の違い以上のものはない。包摂の理論は「トップダウン的」なアプローチであるのに対し、共-意識の理論は「ボトムアップ的」なアプローチである。経験間の統一を説明するために、包摂の理論がまずそれらの経験よりも大きな経験を措定する(そうすることで経験間の関係を規定する)のに対して、共-意識の理論はまず要素的な経験の間の関係を措定する(そうすることでより大きな経験を規定する)。いずれにせよこれら二つの理論は、全体としての経験が要素的な部分をもち、要素的な経験から全体が構成されるという複合性を提案している。これらの主張は結局、次の点に要約される。

(BCD1) 経験についての現象的統一テーゼ:

現象的統一は、経験の間に成り立つ。

(BCD2) 経験の複合性テーゼ:

経験は複数の経験から構成される。

以上の現象的統一に関する理論的なモデルをBCDモデルと呼ぼう。それは自然な提案に見えるが、後に見るように、Tyeによって否定される。表象主義を標榜するTyeは、現象的統一は経験内容であり、経験の間に成り立つものではないと考え、それゆえ(BCD1)を受け容れない。またTyeは、経験内容は複合的でありうるが、ある時点の(健常な)意識主体の持つ経験は一つだと考え、それゆえ(BCD2)を否定する。次節では、このTyeの立場を紹介しよう。

## 4 経験内容としての現象的統一:T モデル

Tyeが展開するアプローチは、先ほどのものとはまったく異なる。現象的統一についての彼の説明は、

彼自身が積極的に推進してきたいわゆる意識の**表象主義**(representationalism)に基づいている。本節ではまず、意識の表象主義の概略を紹介する(4.1節)。そのうえで、現象的統一の説明に表象主義を適用するTyeの議論を解説する(4.2節)。

#### 4.1 意識についての表象主義

表象主義とは、意識経験はある種の表象だという主張である(Harman, 1990; Tye, 1995; Dretske, 1995; Lycan, 1996; Byrne, 2001)。意識は志向的であり、それゆえ志向的対象を持つ。例えば、私の視覚経験はリンゴについてのものであり、また私の聴覚経験は音楽についてのものである。この点だけを見れば自明に見えるが、表象主義の重要な点は、意識経験の性質と内容を区別することにある。

一般に、表象の性質と表象の内容は一致しない。例えば、テーブルの上のリンゴが赤いことを文で表象する際、「テーブルの上のリンゴが赤い」と黒のフォントで記述することができる。ここで、表象の性質(フォントの黒さ)と表象の内容(リンゴの赤さ)は一致する必要がない。このような表象の性質と内容の不一致は、語や文のような記号的表象に限らない。その不一致は、ピクチャリアルな表象にも当てはまる。例えばユニコーンの絵は、ユニコーンを表象する。ここで、絵が表象するユニコーンは四本足であるが、絵そのものは四本足ではない。この例においてもやはり、表象の性質(四本足ではないこと)と表象の内容(四本足であること)は一致しない。

このように表象の性質とその内容を区別することこそが、意識の表象主義にとって重要である。意識が志向的であり志向的対象を持つということに着目し、意識をある種の表象として理解するのならば、意識経験の性質とその内容を区別しなければならない。そして、この区別に基づき表象主義は、現象的特性が意識の性質ではなく意識の内容であることを指摘する。

我々は経験の志向的対象にアクセスするが、経験の性質にアクセスすることは一般にはできない。私がリンゴを見るとき、私はそのリンゴの赤さや丸さを感じる。しかし、私がいくら内観的注意を働かせたところで、依然として私はリンゴの赤さや丸さ以上の質を見いだすことはない。とりわけ私は、リンゴを見るという経験そのものがどのように成り立っているかについて無知である。というのも、私はリンゴやその赤さを見るのであって、それらを見ることを見ているわけではないからだ。このように、経験そのものはいわば透明であり、我々は経験内容として現れる志向的対象にアクセスすることしかできない。したがって、リンゴの赤さといった現象的特性は、経験そのものの性質ではなく、経験の表象内容である。意識経験を表象として理解するとき、現象的特性は、経験そのものの性質ではなく経験という表象の内容と同一視される。これが表象主義の基本的な考え方である。

#### 4.2 現象的統一に対する表象主義的アプローチ

表象主義は現象的特性を説明するための理論だが、Tye(2003)はそれを現象的統一の説明にも適用する。彼は表象主義に基づき、現象的特性を経験の表象内容と同一視したのと同じように、現象的統一を経験の表象内容と見なす。以下では、表象主義的な説明が拡張され現象的統一に適用されるまでの道筋を我々なりにたどり直し、Tyeの主張を確認しよう。

私が、青空を背景とする赤いリンゴを見ているとしよう。このリンゴの赤さと空の青さが私の視覚経験において現象的に統一されているならば、リンゴの赤さだけを見ることや空の青さだけを見ることは異なり、リンゴの赤さと空の青さをともに見るとはどのようなことかといったものがあるはずだ。この点を表象主義的に捉え直せば次の通りである——私の視覚経験において、リンゴの赤さと空の青さがともにあるものとして表象されている。視覚経験そのものは赤くもなく青くもなく、また、赤い視覚経験と青い視覚経験の統一が経験されているわけでもない。視覚経験はただ、赤いリンゴの向こうに青空があるという内容を持つ。表象主義によれば、私は赤経験と青経験が統一されていること(経験の性質)にアクセスすることができず、むしろ統一されたものとしての赤と青(経験の内容)にアクセスするだけである<sup>\*8</sup>。このように現象的統一は経験の性質ではなく、経験の表象内容に見いだされるべきものである。現象的統一のあるところでは、経験の志向的対象が統一されたものとして表象されている。この考えは次の点に集約される。

**(T1) 経験内容としての現象的統一テーゼ:**

**現象的統一は経験内容である。**

この分析は、複数の感覚様相にまたがる現象的統一にも拡張可能である。例えば、リンゴを見ながら友人の話を聞くと、友人の音声とリンゴの赤さという、いわば複合的な経験内容が与えられている。

こうして(T1)は、表象主義から自然に導かれる。表象主義によれば、現象的特性は経験の性質ではなく内容である。ならば意識の統一もまた、その現象的な側面が問題である限り、経験の性質ではなく内容として分析されてしかるべきものである。Tyeは、このような経験内容としての統一を次のテーゼで具体化する<sup>\*9</sup>。

<sup>\*8</sup> 「もし我々が内観を通じて経験に気づくことがないのであれば、経験が統一されていることにも気づいていないはずだ。統一関係は、経験を接続する関係として内観的に与えられはしない。ではなぜ、そのような関係があるとするのだろうか。」(Tye, 2003, 25)

「例えば、私が大きなノイズと光の明るいフラッシュを経験するとしよう。ノイズの大きさはフラッシュの明るさと現象的に統一されている。現象的統一は、経験において表象された質の間の関係であって、経験の質の間の関係ではない。」(ibid, 36)

「...知覚的統一とは、同時に経験された知覚的質が同じ知覚内容に入ることである。通常の知覚者が持つ知覚経験はすさまじく豊かな多-様相的表象内容を持つ。」(ibid, 36)

<sup>\*9</sup> Tye は(T1)が(T<sub>CLOSURE</sub>)を含意すると考えている。ここで我々は、この含意関係を明確にしておきたい。まず表象主義は、現象的特性を経験の性質ではなく内容とみなす。すなわち、表象主義によれば(\$1)が真である。

(\$1) X が経験されるのは、ある経験が X を表象するときそのときに限る。

同様に、現象的統一に関する表象主義の主張は(\$2)である。

(\$2) X と Y が経験されるのは、ある経験が X と Y を表象するときそのときに限る。

重要な点として、現象的統一についての主張として(\$2)が提案されている限り、それは(\$3)と同値なものを見なされてはならない。

(T<sub>CLOSURE</sub>)連言的閉包テーゼ:

質 $Q_1, Q_2, \dots, Q_x$ が現象的に統一されているのは、その主体が内容 $Q_1 \& Q_2 \& \dots \& Q_x$ の経験を持つときかつそのときに限る。

さらにTyeは、このように現象的統一を経験内容の問題と見なすだけでなく、経験そのものについても自説を展開する。意識の統一の問題はしばしば、B&CやDaintonが考えたように、複数の経験がいかにして統一されるのかという形で設定される。これに対してTyeは、経験そのものが統一されることはないと主張する。彼の提案によれば、視覚経験や聴覚経験といった様々な経験が統一されてより大きな経験を形成すると考えるのは誤りである。意識の統一は経験内容に関する問題であり、その統一された内容を持つ一つの経験があるのみである。このように考えることでTyeは、経験の統一は解決すべき問題というよりはむしろ解消されるべき問題だと主張する<sup>\*10</sup>。これが、Tyeの「一経験説」である。

(T2)一経験説:

経験は複数の経験から構成されることはなく、健全な意識主体が持つ経験は一つだけである。

この立場から、一つ例示してみよう。私がリンゴを見ながら音楽を聞くとき、私はリンゴを見るという視覚経験と音楽を聞くという聴覚経験の二経験を持つわけではない。全体としての経験を構成する要素的な

(S3) X が経験されると同時に Y が経験されるのは、ある経験が X と Y を表象するときそのときに限る。

というのも現象的統一にとって重要なのは、経験される二つのものが同時に経験されるということ(だけ)ではなく、それらがともに経験されることだからである。(例えば、分離脳患者が不統一な意識経験を持つという提案は決して、複数の意識経験が非同時的に例化されていると言おうとしているわけではない。)そこで、現象的統一に関するテーゼであることを明確にするため、(S2)で意図されたテーゼは次のように述べられたほうがよいだろう。

(S4) X と Y が現象的に統一されるのは、ある経験が X と Y を表象するときそのときに限る。

このテーゼは次と同値である。(なぜなら一般に、ある表象が X を表象することは、その表象が X を内容として持つことと同値だからである。)

(S5) X と Y が現象的に統一されるのは、ある経験が〈X と Y〉を内容として持つときそのときに限る。

これは(T<sub>CLOSURE</sub>)に他ならない。このようにして、現象的統一に関する表象主義は、連言的閉包を含意する。(なお、(S5)は連言を「と」で表現し、(T<sub>CLOSURE</sub>)では連言を「&」で表現している。ここで、この連言が二項関係であるかどうかについて、我々は前提しない。また我々は、連言という関係的性質を想定することもない。)

<sup>\*10</sup>「この見方では、通常の日常的な意識において、純粋に視覚的な経験とか純粋に聴覚的な経験というものはない。感覚様相を通じた現象学的統一があるところでは、感覚特異的经验は存在しない。それは哲学者と心理学者の想像の産物でしかない。そしてそれゆえこれらの経験を統一するという問題は存在しない。統一されるべき経験がないからだ。これは各感覚についても言える。多数の同時的な視覚経験があつて、単一の複合的な視覚経験を形成しているというわけではない。単一の多様相的经验があつて、それが様々な豊かさで記述可能なのだ。」(Tye, 2003, 28)

経験といったものではなく、実際にあるのは、視覚的質と聴覚的質をともに表象する一つの経験だけである。哲学者や心理学者は「リンゴの視覚経験がある」とか「音楽の聴覚経験がある」といった仕方で語ることがあるが、実際にそういうものがあるわけではなく、ただ「リンゴの視覚経験」といった部分的で不完全な記述が可能なのである。このようにTyeの考えでは、感覚機能に障害のない意識的な人間個体は、ある時点に単一の経験だけを持ち、そしてその経験はすべての感覚的質を統一されたものとして表象する。

(T2)が先に見た(BCD2)と対立することは明らかだろう。B&CとDaintonはともに、全体としての経験が要素的な経験から構成されると考える。他方でTyeによれば、全体としての経験が要素的な経験から構成されることはなく、経験そのものは一つであり、その統一が問題になることはない。彼は一つの意識経験が非常に豊かな複合的内容を持つと考えることで、(T2)を主張する。

以上の一連のテーゼ——(T1)、それを具体化した( $T_{\text{CLOSURE}}$ )、そして(T2)——から成る統一の理論的理解を、Tモデルと呼ぶことにしよう。

TモデルはBCDモデルと明確に対立する。(BCD1)によれば統一は経験に見いだされるものであるが、(T1)によれば統一は経験内容に見いだされるものである。また(BCD2)によれば経験は複合的構造を持つが、(T2)によれば経験は複合的構造を持たない。

二つのモデルは、現象的統一をまったく異なる仕方で取り扱う。現象的統一は、出発点として、〈一連の経験をともに持つとはどのようなことか〉として特徴づけられたが(2.6節参照)、BCDモデルにとってこれは問題のない現象的統一の特徴づけであり、そしてその本性は経験間関係と複合的構造という観点から理論的に理解される。しかしTモデルでは、現象的統一は(T1)によって〈一連の内容をともに持つとはどのようなことか〉として理解され、さらにそれは( $T_{\text{CLOSURE}}$ )によって〈連言的内容の経験を持つとはどのようなことか〉として具体化される。このように考えるとき、経験そのものがどのように統一されるのかという問題は解消される。というのも、経験が一連の質を統一されたものとして表象するということをもって、現象的統一についての説明は尽きているからである。

我々は、表象主義的な現象的統一の説明(T1)とそれを具体化する( $T_{\text{CLOSURE}}$ )が、(BCD1)よりももっともらしいと考える。というのも、現象的統一を我々に呈示されたものとして理解するならば、それは経験することではなく経験されているものの属性であるはずだからだ。ならば、統一は経験そのものにではなく経験内容に見いだされるものと考えべきである。ただし我々は今回、このような表象主義的アプローチの正しさを論証することよりも、その適切な形態を探ることを試みたい。我々の見るところ、Tモデルは表象主義的な観点を徹底していない。次節ではこの点を、(T2)と(BCD2)を対比させることで明らかにしよう。

## 5 経験の(非)複合性をめぐる論争

(BCD1)と(T1)は、意識の現象的統一をどこに見いだすかに関して対立する。前者によれば統一は経験間の関係であり、後者によれば統一は、表象される諸特徴がともにあるものとして表象されることである。この対立は、経験の(非)複合性の主張にも反映される。(BCD2)によれば、経験は要素的な経験から構成される。他方で(T2)によれば経験は一つであり、それを構成する要素的な経験は存在しない。

我々の見るところ、このような(BCD2)と(T2)の対立は結局、経験をどう個別化すべきかという問題に帰着する。だが我々の考えでは、経験の個別化をめぐる問題は、経験というものの概念分析に関わるというよりはむしろ科学的探求に委ねるべき事柄であり、様々な観点に応じて柔軟に対処できる可変的な問題である。それゆえ我々は、経験そのものの個別化についての主張である(BCD2)と(T2)について中立を保つことを——特に表象主義者はそうすべきことを——以下で提案する。

### 5.1 (BCD2)について：要素経験をどう個別化するのか？

(BCD2)によれば、経験は複数の要素的な経験により構成される。だとすれば、それらの要素的な経験はいかにして個別化されるのかという問題が当然生じる。BCDモデルからの一つの自然な提案は、全体としての経験内容を構成する要素的な内容に一致するような仕方で、経験をそれぞれ個別化するというものだろう。実際、Bayne(2005)はそのような提案を示している<sup>11</sup>。例えば私が赤いリンゴを見ながらドの音を聞くとしよう。この全体としての経験内容を構成する要素的な内容のそれぞれに対応して、私は赤い色の経験をもち、そしてドの音の経験を持つと考えればよい。Bayneによれば、このように内容の複合性に対応して経験の複合性が成り立つと考えることは自然である。

しかし、経験内容によって経験そのものを個別化しようとする提案は一見もっともらしいものの、それは別の面で不自然な帰結を持つように思われる。経験内容の部分ごとに経験を個別化することが許されるのならば、視覚経験をきわめて細かく個別化することも可能なはずである。例えば、マーブル模様の壁を見ているとき私は、マーブル模様をつくる細かなパッチごとに一つの経験をもち、それゆえ数十や数百の視覚経験を持っているということになるだろう。これは自然な個別化だろうか。自然だとしたら、どのような意味でそう言えるのだろうか。経験が複合的構造を持っていればそれは自然かもしれないが、それはまさに目下の係争点に他ならない。

### 5.2 一経験説(T2)：表象主義にとって必要か？

他方で(T2)によれば、経験は要素を持たず、それゆえ経験そのものの複合性は否定される。一連の質が現象的に統一されているとき、それらをともに表象する単一の経験があるだけである。さらにTyeは、Carnap(1969)の考えを踏まえ、ある時点での一つの経験のみを措定するだけでなく、通時的な切れ間のない「意識の流れ」の全体(大雑把に言って、目を覚ましてから眠りにつくまでの間の意識経験の全体)を一つの経験と見なす。切れ間のない意識の流れの全体は、時点や感覚様相に沿ったその部分的內容が記述可能であるものの、そのことによって経験そのものが要素的に個別化されることはない。時点や感覚様相ごとの経験内容はあくまでも、単一の経験の內容の部分的記述に過ぎないのである。

だがBayne(2005)も指摘するように、一経験説は通時的な意識の統一に関して困難を抱えることになる。というのも一経験説は、一つの意識の流れにおいて異なる時点に経験されるものの間にも統一を見いだすからである。もしも通時的な意識の流れの全体を単一の経験と見なすならば、例えば、目覚めのコーヒーの味と夕食時のワインの味は同じ経験の異なる記述内容ということになるが、私がそれらをともに経験し

<sup>11</sup> また Bayne(2008)は、経験が経験内容・経験主体・経験時点の三点によって個別化されると主張する。

ているとはいいがたい。

では、一経験説をより穏健な主張に修正してはどうだろうか。すなわち、私は通時的には複数の経験を有しているものの、ある時点においては一つの経験だけを持つと考えるのである。だが我々の考えでは、この提案もまた、表象主義を徹底する限り明かではない。表象主義の考えに従えば、我々は経験そのものの成り立ちについて内観的には無知である。というのも(表象主義によれば)、我々の意識に直接与えられるのは経験の内容であって、経験そのものではないからだ。だとすれば、((T2)が主張するように)経験は要素から構成されていないかもしれないが、((BCD2)が主張するように)経験が要素から構成されているという可能性もまた、アプリオリには排除できないはずである。表象主義自体は経験の(非)複合性について中立であり、少なくともそれから一経験説は自動的に帰結しない。Tyeは、多くのことを主張しすぎているように思われる。表象主義者が現象的統一について主張すべきことは、一連の質がともに表象され、これが現象的統一の本性であるということだけである。

### 5.3 経験の個別化は経験科学の問題である

もしかしたら経験は複合的であり、そのおかげで経験内容は複合的なものかもしれないし、あるいはそうではないのかもしれない。だが両陣営とも、その決定的な根拠を示していない。我々の見るところ、それを示すことができないのは当然である。なぜならそれは、経験というものをどう概念的に分析するかという問題ではなく、科学的探求に委ねるべき問題だからである。

次のアナロジーを考えよう。ある装置が、AがBを愛することを表象するとしよう。このときこの装置は、Aの表象とBの表象と愛することの表象を有し、そしてそれらを合成してAがBを愛することを表象するのだろうか。それは、概念分析によっては判明しない。というのも、その答えを知りたいければ、その装置がどのような表象メカニズムを有しているかを調べなければならないからだ。(ある表象システムがシンボル表象を利用しているのか、あるいはコネクショニスト表象を利用しているのかは、経験的な問題である。)これと同じことは経験の構造についても言える。ある人が赤と青をともに経験するとき、その人に赤の経験と青の経験があるかどうかは、内観や概念分析だけでは判明しない。なぜならそれは、我々の経験の性質の問題であるからだ。これを明らかにするためには、経験の表象的基盤の構造やメカニズムに関する研究が必要になるだろう。例えばリンゴを見るときの経験は、色を表象するシステムや形を表象するシステムなど、複数の表象システムによって支えられているのかもしれない。そうならば、我々のリンゴの視覚経験は複合的な経験によって構成されているとするのがもっともらしく思われる。またそれとは逆に、赤くて丸く甘い香りのするリンゴといった複合的な表象内容でさえ、分解不可能な一つの経験によって有されているのかもしれない。もちろん我々はここで、これらの提案が正しいと言いたいわけではない。我々が指摘しているのは、それは内観や概念分析だけでは分からないということである。

以上により我々は、経験そのものの(非)複合性をめぐる論争について、次のような診断を下す。我々はまず、現象的統一を内容として理解しようとする表象主義に同意し、Tyeの(T1)を受け容れる。しかし表象主義にとって、(T2)の正否は抜き差しならぬ問題ではないし、(BCD2)についてもまた同様である。つまり、(BCD2)と(T2)の対立は、現象的統一の表象主義的な理解にとって核心的なものではない。と

いうのも、表象主義それ自体は経験の個別化について中立的だからである。経験の個別化はむしろ科学的探求に委ねるべき事柄であり、そして様々な科学的アプローチが異なる経験の個別化を許容するならば、それに応じて柔軟に対処すべき問題である。

#### 5.4 関係性は経験内容にはない

以上の通り、Tモデルには不要な主張が含まれていた。我々は表象主義的な観点から(T1)と(T<sub>CLOSURE</sub>)を支持するが、(T2)に関して中立である。すなわち、統一とは、経験の間の関係でなく、経験内容に見いだされるべきものである。

だが、ここで次のような考えが生じるかもしれない。もし統一が経験内容に見いだされるべきなら、ある種の関係性——個々の現象的特性を統一されたものへと関係づけるようなもの——が経験内容であることになりそうである<sup>\*12</sup>。実際、(T<sub>CLOSURE</sub>)において、統一は経験内容の連言によって表現されている。すると、連言的關係というものが経験内容としてあり(いわば、&という経験内容)、この関係性が統一を可能にしているのではないか。そうだとすると、これは様々な疑問を呼び起こすように思われる。例えば、この関係性で結ばれる個々の経験内容が変われば、この関係性もまた質的に変わるのだろうか。またより深刻な懸念として、次のようなものもある。もしこの関係性(&)が、赤さや青さのような経験内容と同じような経験内容なのであれば、無限後退が生じる。というのも、例えば視野のうちに赤いものと青いものを同時に見ているとき、視覚経験は赤&青という経験内容を持つ。ここで赤と青は&を介して統一されている。だがもしも&もまた経験内容ならば(これを&<sub>1</sub>と呼ぼう)、赤と&<sub>1</sub>、青と&<sub>1</sub>が統一されていなければならない。そうだとすると、経験内容は赤&&<sub>1</sub>&青というものでなければならない。ここで新たに見いだされる二つの&もまた経験内容ならば(これらを&<sub>2</sub>、&<sub>3</sub>と呼ぼう)、赤と&<sub>2</sub>、&<sub>2</sub>と&<sub>1</sub>等々も統一されなければならない...といった仕方で、無限後退が生じる<sup>\*13</sup>。

こういった懸念を回避するには、&のような関係性は経験内容としてはないと言うべきであろう。だがそれは(T<sub>CLOSURE</sub>)の放棄に他ならないのではないのか。すると、そもそも(T1)が脅かされるのではないのか。(というのも、(T1)を一つの仕方で実質化したものが(T<sub>CLOSURE</sub>)だったことを思い出されたい。)すると、表象主義的に現象的統一を理解することはできないのではないのか。

だが、決してそのようなことはない和我々は考える。この点を理解するために、まず次のアナロジーを考えられたい。ある状況にリンゴ群があるとしよう。我々はそれを「第一のリンゴ&第二のリンゴ&...」という仕方で表現できるが、そのリンゴ群のうちには第一のリンゴや第二のリンゴという存在者に加えて、&という数的に別個の存在者が存在するわけではない。これと同様に、我々がリンゴ群を視覚的に経験するとき、我々はその経験内容を「第一のリンゴ&第二のリンゴ&...」という仕方で表現できるが、リンゴ群の経験内容には、第一のリンゴや第二のリンゴという内容に加えて、&という数的に別個の内容が存在するわけで

<sup>\*12</sup> この点は査読者の指摘による。

<sup>\*13</sup> 経験間関係を指定することによる同様の無限後退は、Tye(2003, 21-2)により論じられている。この無限後退を避けるために Tye は経験間関係を否定する。だが同じ問題は、経験内容としての関係についても生じるということを、我々はここで指摘する。



はない。一般的に言えば、あるものが要素群から成る複合体であるとき、我々はその要素間の関係として存在者を措定する必要はない。この考えを現象的統一にあてはめれば次の通りである。まず現象的統一とは(表象主義的な見解によれば)経験ではなく経験内容に見いだされるべきものである。それゆえ、現象的特性から構成される複合体が、我々の(いわば)全体的な経験内容である。(そしてもちろん、経験そのものが複合体であるかどうかについて我々は中立である。)この点は、全体的な経験内容が要素的な経験内容から成ることを含意するが、しかしそういった要素的な経験内容に加えて、それらをつなぐ関係性が経験内容としてあることを含意しない。そういった関係性なしに、経験内容が複合体であることこそが、現象的統一である。

我々は、経験内容を言語的に記述するために、「&」という記号を用いることがある。しかしだからといって、赤さや丸さといった一連の経験内容に加えて、&という経験内容が何かしら数的に別個な仕方で存在することにはならない。我々は、赤さや丸さからなる複合的な経験内容を文で記述するときに、そういった表現を用いざるをえないだけである。経験内容には関係のようなものは(存在者としては)ない。

## 6 現象的統一のオーバーフロー問題: 二通りの帰結

上述のとおり我々の考えでは、(BCD2)と(T2)の対立は、現象的統一の表象主義的な理解にとって核心的なものではない。現象的統一は経験内容に見いだされるべきものであるとする限り、(BCD2)を否定して(T2)を主張する利点はない。それゆえ、表象主義者は(T1)だけを主張すればよい。だが我々の見るところ、(T1)やその具体化である( $T_{\text{CLOSURE}}$ )に関してもまた、表象主義的な現象的統一の理解にとって重要な問題がある。本節ではまずその問題を明らかにし、そのうえで解決策として二つのモデル(SモデルとOモデル)を提案する。しかし、それらまったく正反対の二つのモデルのうちいずれを採用すべきかについては、読者の判断に委ねたい。

まず問題の背景として、次の点に触れておこう。表象主義にはそもそも不足する点があると指摘されることがある。すなわち、表象主義だけでは、意識的な表象と無意識的な表象を区別できないという点である。現象的特性は表象内容であるという表象主義の主張を、現象的特性と表象内容の同一性として理解するかぎり、我々が有する多くの無意識的表象もまた意識的であることになってしまう。そこで表象主義者がしばしば訴えるのが機能主義的な考えである。すなわち、特定の機能的特性を持った表象が意識的表象であると考え、その内容を現象的特性と同一視するのである。意識についての表象主義が、機能主義を補完する立場として提唱されてきたことから(C.f. Harman, 1990)、この戦略は自然なものに見える。

だが我々の見るところ、こういった機能主義的な戦略として最近提案されているものは、現象的統一を考慮に入れるとき破綻する。我々は本節でこの問題を指摘するとともに(6.1節, 6.2節)、それを回避するための二つのモデルを提案し(6.3節)、そして経験的事例に対してそれが持つ含意を示したい(6.4節)。

## 6.1 問題の導入

問題をもたらすのは、以下の現象的統一の連合テーゼ(K)と機能主義の主張(P=A)の二つである。前者が現象的統一に関する自然な主張であるように思われるのに対し、後者は表象主義を補完する機能主義的な主張である。まず、(K)を以下に示す<sup>\*14</sup>。

(K)連合テーゼ:

経験内容に入る質 $Q_1$ と $Q_2$ が現象的に統一され、 $Q_2$ と $Q_3$ が現象的に統一され、 $\dots$   $Q_{x-1}$ と $Q_x$ が現象的に統一されているならば、 $Q_1$ と $\dots$ と $Q_x$ はすべて現象的に統一されている。

このテーゼが意図するのは、次のようなことである。例えば私が、リンゴを見るとともにドの音を聞き、その同じドの音を聞くとともにバナナを見る(すなわち、経験内容としてのリンゴとドの音が現象的に統一され、そのドの音とバナナが現象的に統一される)という場合、これら三つの経験内容がすべて現象的に統一されているということは自然に思われる。そのとき私は、リンゴの視覚的特徴とドの聴覚的特徴とバナナの視覚的特徴を、ともに経験しているだろう。もっともこのテーゼは、通時的なケースでは崩壊するように思われる。というのも、リンゴを見ながらドの音を聞き、次の瞬間、その同じドの音を聞いてバナナを見るという場合には、リンゴとバナナの視覚的特徴が現象的に統一されているとは言えないだろうからである。だが共時的な現象的統一については、(K)が破綻するという状況は想像しがたいように思われる。

他方、表象主義を補完するための機能主義は、意識とアクセス可能性(accessibility)の一致を主張する。アクセス可能性とは、意識経験に通常伴うとされる機能的特性であり、発話、推論、随意行動の制御のために準備されていることとして当初定義された(Block, 1995)。これは、意識と無意識の対比を考えれば分かりやすい。例えば我々はサブリミナル知覚の内容を言語的に報告することができないのに対して、意識的知覚の内容は言語的に報告することができる。また、無意識的な信念や欲求は非常に限られた仕方でのみ行動に影響するのに対し、意識的な信念や欲求は、合理的推論をともなった行動計画や、それに基づいた随意行動の制御のために利用できる。経験内容がこのような仕方を利用可能であることが、アクセス可能性である。機能主義にとっては、このように経験内容(現象的特性)がアクセス可能な表象内容に一致することが期待される。

<sup>\*14</sup> (K)は、現象的統一が二項関係であることを前提しない。仮に現象的統一が二項関係であるとすれば、それが推移性を満たすかどうかという形で、我々が以降で示すものと同様の問題を提起することもできる。すなわち、連合テーゼ(K)を次の主張に代え、それと機能主義的主張の両立不可能性を指摘することができる。

推移性テーゼ:

現象的内容の質である $Q_1$ と $Q_2$ が現象的に統一され、 $Q_2$ と $Q_3$ が現象的に統一されているならば、 $Q_1$ と $Q_3$ は現象的に統一されている。

これもまた現象学的に自然な主張であり、これもやはり通時的なケースでは崩壊するが、共時的なケースでは成り立つと考えるのがもっともらしい(C.f. Dainton, 2000/2006, ch.4)。

(P=A) アクセス可能性テーゼ:

経験内容はアクセス可能な内容である。

そして今回我々は(P=A)を次のように具体化する。(これはとりわけTyeの機能主義的主張に沿った具体化である<sup>\*15</sup>。なお、他の仕方で(P=A)を具体化しても問題は変わらないだろう<sup>\*16</sup>。)

(P=A<sub>B</sub>) 信念形成可能性テーゼ:

経験内容は信念形成に利用可能な内容である。

問題は、機能主義的主張(P=A<sub>B</sub>)が、統一に関する現象学的主張(K)と整合的でないことである。例えば、私が日常生活における詳細なシーンを見ているとき、そのシーンのなかの任意の二つの特徴はともに経験されており、したがって現象的に統一されている。それゆえ(K)により、そのすべての視覚的質が現象的に統一されており、また(T<sub>CLOSURE</sub>)により、それらすべての連言が経験されていることになる。ところで、(P=A<sub>B</sub>)が真ならば、その連言が信念形成のために準備されているのでなければならない。だが、それは難しいように思われる。私は、視野の一部にある質についての信念を(例えば、ある物体が赤っぽいという信念を)形成することはできるが、視野にあるすべての質について一挙に詳細な信念を形成することは困難である。複数の感覚をまたがるケースについては、状況はさらに深刻である。私がある意識的状态にいますとき、(K)と(T<sub>CLOSURE</sub>)そして(P=A<sub>B</sub>)によって、私の視覚的質・聴覚的質・味覚的質・嗅覚的質・身体感覚的質の連言が信念形成のために準備されているのでなければならない。だが、私があらゆる感覚に現れるすべての質について詳細な信念を形成することは難しいだろう<sup>\*17</sup>。

ここで我々が指摘しているのは、現象的統一を考慮に入れるときに(P=A<sub>B</sub>)が疑われるということだ。(P=A)や(P=A<sub>B</sub>)の正否は最近哲学者と認知科学者の注意を引いてきたが、我々の見るところ、現象的統一を考慮に入れるときにこそ、機能主義にとっての問題は深刻なものとなる。我々は、一つの有名な実験研究に触れながら、この点を論じることにする。

<sup>\*15</sup> Tye は意識の表象主義と機能主義をともに採用しており、とりわけその機能主義的な側面は「PANIC 説」として主張されている。彼によれば現象的特性は経験において表象された内容であり、そしてそれは信念形成のために準備された内容である(Tye, 1995, ch.5; Tye, 2003, ch.1)。これは機能主義的主張(P=A<sub>B</sub>)に他ならない。それゆえ、以下で示す我々の議論が正しいとすれば、Tye の理論は、現象的統一を経験内容とみなす表象主義的説明と、経験内容をアクセス可能な内容として同定する機能主義的説明との間に不整合を抱えることになる。

<sup>\*16</sup> 他の具体化として、例えば高階思考(Rosenthal, 1986)や大域的アクセス可能性(Baars, 1988; Dehaene & Nacchache, 2001; Dennett, 2001)によるものが考えられるだろう。だが、それらは報告を可能にする認知的基礎とされており(C.f. Block, 2001, 2007), そのため(後で述べる通り)すべての特定の現象学を報告できないという事実によって、結局それらによる具体化は(P=A<sub>B</sub>)と同じ命運にある。

<sup>\*17</sup> この問題の通時的なバージョンは、Bayne(2005)や Kobes(2005)で指摘されている。この点は他で詳しく論じたい。

## 6.2 (K)と(P=A)の両立不可能性

Sperling(1960)の実験では、被験者は3行3列に描かれた計9文字を含むシーンを瞬間的に(数十ミリ秒)呈示される。被験者はすべての文字を見たという印象を有するが、それでも一部の文字(平均4文字)についてしか、何の文字であったかを報告することができない。

反機能主義を標榜するBlock(2007a)は、この実験結果を(P=A)の反例と見なす。彼の解釈によれば、この実験結果は、被験者が信念を形成することのできなかった視覚経験内容があったことを示唆する。視覚的な現象的特性は9文字すべてについて存在したが、アクセス可能性(信念形成可能性や報告可能性)は平均4文字に限られるので、アクセス可能性を越える現象的特性が存在するというわけだ。こうしてBlockは、現象的特性がアクセス可能性をオーバーフローすると主張する。

これに対して(P=A)を擁護する機能主義者にとっては、二通りの応答が可能である。これらの応答についての我々の診断を予告しておけば、第一の応答と比較して第二の応答は一見有望に思われるものの、それは現象的統一の連合テーゼ(K)を考慮に入れるときにつまりずく。我々の見方では、Blockが意図したオーバーフロー問題は、現象的統一を考慮に入れるときにこそ深刻なものになる。

### 6.2.1 第一の応答とその難点

第一の応答によれば、被験者はそもそもすべての文字の詳細を見ていなかった。すなわち被験者は、数文字に対しては特定の文字としての現象的特性を持ち、それ以外の文字に対しては不特定の文字としての現象的特性を持っていた(すなわち具体的に何の文字であるかという現象的特性はなかった)。しかし被験者は、何の文字であるかを報告できなかった刺激についても、それが文字のようなものではあったと報告することができる。それゆえ、そのような粗い特徴のアクセス可能性を考えることができるだろう。だとすれば、この粗い特徴のアクセス可能性に一致して粗い現象的特性だけがあったとすることができる。ここで、特定の文字としての(すなわち詳細な)現象的特性は**特定の現象学(specific phenomenology)**と呼ばれ、不特定の文字としての(すなわち粗い)現象的特性は**一般的現象学(generic phenomenology)**と呼ばれる(Block, 2007b)。目下の応答によれば、一部の文字については特定の現象学があったが、それ以外には一般的現象学だけがあった。そしてそれらに一致して、一部の文字については特定の現象学のアクセス可能性があり、他の文字については一般的現象学のアクセス可能性があったと考えればよい。このように考えれば、アクセス可能性をオーバーフローする現象的特性は存在せず、(P=A)を維持することができるだろう(Kouider, et al., 2007; Nacchache and Dehaene, 2007; Papineau, 2007)。

しかし、この応答には難点がある。Sperlingのもう一つの実験では、被験者は視覚刺激呈示の直後に「キュー」(手掛かり)を与えられる。例えば、高音のキューが鳴るなら上の行、中間の音のキューが鳴るなら中間の行、低音のキューが鳴るなら下の行を意味するよう、予め取り決めておく。このとき被験者は、どのキューを与えられても、それが指定する行のすべての文字について詳細に報告できるのである。仮に第一の応答が正しいとすれば、視覚刺激呈示時に一部の文字だけの特定の現象学があったことになる。あるトライアルでは被験者は、(例えば)上の行の3文字を含めた4文字についてだけ特定の現象学を持ち、他の5文字については一般的現象学のみを持つということになる。だがそうすると、被験者がキュー

に応じて任意の行について詳細に報告することがなぜ可能なかが分からない。キューが時間的に逆行して視覚経験に影響し、一般的現象学を特定の現象学に変更するというのでない限り、このことをうまく説明できないだろう<sup>\*18</sup>。

### 6.2.2 第二の応答と現象的統一がもたらす問題

そこで第二の応答として、次のように提案されるかもしれない。まず、すべての文字について特定の現象学があったことを認める。そして、どの文字の特定の現象学もアクセス可能であった。ただし、一部の文字の特定の現象学への実際のアクセスが、他の文字の特定の現象学のアクセス可能性を破壊するため、実際にアクセスできたのは(平均)4文字だけだったのだ(Chalmers, 1997)。この応答は明らかに、先に見た第一の応答の難点を免れている。そして、この第二の応答が正しければ、アクセス可能性をオーバーフローする現象的特性が存在すると考える必要はなく、 $(P=A)$ は維持される。

だが我々の考えでは、この応答は現象的統一を考慮に入れるとき破綻する。というのも、この応答に従えば、個々の特定の現象学はアクセス可能であるが、それでも、これらの特定の現象学の連言はやはりアクセス可能性をオーバーフローすることになるからだ。第二の応答によれば、9文字について特定の現象学が存在するはずである。ところがそのとき、 $(K)$ を前提すれば、それらの9文字の特定の現象学すべてが現象的に統一されていることになり、さらに $(T_{\text{CLOSURE}})$ により、それらの連言(あるいは全体)が経験されていることになるはずである。しかし、そういった連言(あるいは全体)はアクセス可能性をオーバーフローする。というのも、9文字すべてに対して何の文字であるかの信念を形成し報告することは不可能だからである。第二の応答は、特定の現象学のそれぞれをアクセス可能性で説明することには成功しているかもしれないが、特定の現象学の全体を説明することには失敗しているのだ。

問題は次の点にある。第二の応答は、9文字の個々の特定の現象学がアクセス可能であるとするので、 $(P=A)$ を維持しようと試みる。だが $(K)$ と $(T_{\text{CLOSURE}})$ は、9文字に特定の現象学があつてそれらが現象的に統一されているなら、その連言もまた経験内容であることを含意する。このとき $(P=A)$ により、この連言についての信念形成やその報告が可能でなければならない。そして、それは我々に過大な認知能力を要求する。結局、個々の特定の現象学について $(P=A)$ は成立しても、その全体について $(P=A)$ が成立するとは限らないのである。このように、現象的特性はアクセス可能性をオーバーフローするという問題は、現象的統一を考慮に入れるとき深刻となる。このように、 $(P=A)$ を擁護するために第二応答を採用しても、現象的統一に関する現象学的主張 $(K)$ を受け容れる限り、結局 $(P=A)$ は否定されてしまう。

論点を明らかにするため、 $(P=A_B)$ で機能主義的主張を具体化しながら、我々の議論を次のように再構成しておこう。まず事実として、被験者は任意の2文字(の特定の現象学)からなるペアを報告することができることを思い出されたい<sup>\*19</sup>。一般に報告は信念形成に基づいているので、次が言える。(なお、文字を $L_1, L_2, \dots, L_9$ , それらの特定の現象学を $S(L_1), S(L_2), \dots, S(L_9)$ , 被験者となる経験主体を $C$ と表記する。)

<sup>\*18</sup> この難点は Block(2007b, 531-3)で指摘されている。

<sup>\*19</sup> ただしすでに触れたとおり、実際にはもっと多く(平均して任意の4文字以下の詳細)を報告できる。ここでペアについて論じるのは単純化のためであり、議論に影響を及ぼすことはない。

(1-1) Cは,  $S(L_1)$  &  $S(L_2)$ を内容とする信念を形成しうる.

(1-2) Cは,  $S(L_1)$  &  $S(L_3)$ を内容とする信念を形成しうる.

(1-3) Cは,  $S(L_1)$  &  $S(L_4)$ を内容とする信念を形成しうる.

...

(1-36) Cは,  $S(L_8)$  &  $S(L_9)$ を内容とする信念を形成しうる.

(ここで36のテーゼがあるのは, 9文字のうち任意の二つを選ぶ仕方が36通りあるからである.)

ここで次を思い出されたい——機能主義的主張( $P=A_B$ )によれば, 信念形成可能な内容と経験内容  
は一致する. この( $P=A_B$ )と(1-1) ... (1-36)から, 次が言える.

(2-1) Cは,  $S(L_1)$  &  $S(L_2)$ を経験内容として持つ.

(2-2) Cは,  $S(L_1)$  &  $S(L_3)$ を経験内容として持つ.

(2-3) Cは,  $S(L_1)$  &  $S(L_4)$ を経験内容として持つ.

...

(2-36) Cは,  $S(L_8)$  &  $S(L_9)$ を経験内容として持つ.

ここまでは何の問題もない. だが現象的統一を考慮に入れるとき, 問題が生じる. 次を思い出されたい  
——現象的統一に関する表象主義を実質化したテーゼ( $T_{\text{CLOSURE}}$ )によれば,  $Q_1$ と $Q_2$ が現象的に統一さ  
れるのは,  $Q_1$  &  $Q_2$ が表象される(すなわち $Q_1$  &  $Q_2$ が経験内容として持たれている)ときかつそのときに限る.  
この( $T_{\text{CLOSURE}}$ )と(2-1) ... (2-36)より, 次が言える.

(3-1) Cにおいて,  $S(L_1)$ と $S(L_2)$ は現象的に統一されている.

(3-2) Cにおいて,  $S(L_1)$ と $S(L_3)$ は現象的に統一されている.

(3-3) Cにおいて,  $S(L_1)$ と $S(L_4)$ は現象的に統一されている.

...

(3-36) Cにおいて,  $S(L_8)$ と $S(L_9)$ は現象的に統一されている.

さらに次を思い出されたい——現象的統一に関する現象学的主張(K)によれば,  $Q_1$ と $Q_2$ が現象的に  
統一され, そして $Q_2$ と $Q_3$ が現象的に統一されるならば,  $Q_1$ と $Q_2$ と $Q_3$ は現象的に統一されている. この(K)  
と(3-1) ... (3-36)より次が言える.

(4) Cにおいて,  $S(L_1)$ と $S(L_2)$ と... $S(L_9)$ は現象的に統一されている.

ここで再び( $T_{\text{CLOSURE}}$ )を適用しよう. ( $T_{\text{CLOSURE}}$ )と(4)から次が言える.

(5) Cは,  $S(L_1) \& S(L_2) \& \dots S(L_9)$ を経験内容として持つ.

ここで再び  $(P=A_B)$  を適用しよう.  $(P=A_B)$  と (5) から次が言える.

(6) Cは,  $S(L_1) \& S(L_2) \& \dots S(L_9)$ を内容とする信念を形成しうる.

だがこれは実験結果に反する. なぜなら, 被験者は9文字すべての特定の現象学を報告することができないからだ. 特定の現象学の連言  $S(L_1) \& S(L_2)$  や  $S(L_1) \& S(L_3)$  などとはどれも報告可能であり, それゆえその信念形成は可能であるが, すべての文字の特定の現象学の連言  $S(L_1) \& S(L_2) \& \dots S(L_9)$  は, 報告可能ではなく, それゆえその信念形成は可能でない.

この議論に対して, 次のような疑問があるかもしれない. このような問題が生じるのは, (T1)に加えて (T2) という主張 (経験は一つである) を受け容れるときだけなのではないか. もし (T1) を受け容れつつ (T2) を否定し, 同時に (BCD2) を受け容れるのならば, ここで言われている問題は生じないのではないか. というのも, (T2) によれば経験は一つだが, (BCD2) によれば経験は複数あるからだ. するとこの問題は, 表象主義のうちでも (T2) を受け容れるような特殊な立場に固有の問題なのではないだろうか. さらに, そうだとすればやはり経験そのものに関する (BCD2) と (T2) の競合は, 現象的統一にとって核心的な問題なのではなかろうか. こういった疑問が生じるかもしれない<sup>\*20</sup>.

だが上の議論において, (T2) は直接的にも間接的にも何の役割も果たしていない. そこで前提されているのは, (K),  $(T_{\text{CLOSURE}})$ , そして  $(P=A_B)$  のみである. 実際, 仮に (BCD2) を採用したとしても, これら三つを前提する限り, まったく同じ問題が生じる.

以上の議論が正しければ, 表象主義の観点から  $(T_{\text{CLOSURE}})$  を支持する場合, 現象的統一の連合テーゼ (K) は, 経験内容についての機能主義的主張  $(P=A_B)$  と両立不可能である. 我々の考えでは, ここで二つのオプションがある. 一方は機能主義のテーゼ  $(P=A_B)$  を放棄する道であり (Sモデル), 他方は現象学的テーゼ (K) を放棄する道である (Oモデル).

### 6.3 二通りの帰結: SモデルとOモデル

あくまでも現象的統一に関する表象主義的主張  $(T_{\text{CLOSURE}})$  を維持するならば, 現象的統一に関する現象学的主張 (K) か経験内容同定に関する機能主義的主張  $(P=A)$  のどちらかを否定せねばならない. これらの選択肢に基づいた考えをそれぞれ, 「Sモデル」および「Oモデル」と呼ぶことにする.

Sモデルは,  $(P=A)$  を否定し (K) を維持する.  $(T_{\text{CLOSURE}})$  を前提する場合, 現象学的主張 (K) から次

<sup>\*20</sup> この点は査読者の指摘による. このような疑問が動機づけられる考えはもしかしたら, 個々の特定の現象学に対応して経験そのものが分割され, そしてそれら (の内容) を通じた現象的統一は実際には生じていないというものかもしれない. その考えは, (K) の否定に踏み込むことになり, そしてそれはまさに我々が以下で Oモデルとして提案するものに他ならない.

が帰結する——経験内容を通じた現象的統一があるなら、その内容に入る質すべての連言が経験されている。しかしSperlingの実験において顕著なように、その主体は、そういった連言を報告したり、信念形成のために利用したりすることができないことがある。Sモデルによれば、これが意味するのは、現象的に統一された経験内容は複合的な現象的特性ではあるが、その主体にとってそのすべてがアクセス可能なわけではないということである。このモデルが描くシナリオでは、(K)が(P=A)と両立不可能であるということは、(T<sub>CLOSURE</sub>)や(K)が成り立たないことを示してはならない。それはむしろ、現象的特性はアクセス可能性(とりわけ信念形成可能性)と同一視できないということを示している。複合的な経験内容の連言に主体がアクセスできない場合にも、それらを通じた現象的統一は、(T<sub>CLOSURE</sub>)と(K)を満たすような仕方で成立している。

他方で、Oモデルは(K)を否定し(P=A)を維持する。Sperlingの実験では、被験者はどの3文字や4文字の組み合わせについても、それらが何の文字であるかについてアクセスすることができる。そして被験者は、それに一致した特定の現象学の連言を経験している。例えば被験者は、S(L<sub>1</sub>)&S(L<sub>2</sub>)&S(L<sub>3</sub>)や、S(L<sub>3</sub>)&S(L<sub>4</sub>)&S(L<sub>5</sub>)や、S(L<sub>5</sub>)&S(L<sub>6</sub>)&S(L<sub>7</sub>)などについて、それらを内容とする視覚経験を持つ。だが(K)に反して、被験者は一定の容量を越える特定の現象学の連言を経験しておらず、例えばS(L<sub>1</sub>)&S(L<sub>2</sub>)&S(L<sub>3</sub>)&S(L<sub>4</sub>)&S(L<sub>5</sub>)&S(L<sub>6</sub>)&S(L<sub>7</sub>)を経験していない。こうして現象的特性はアクセス可能性をオーバーフローせず、(P=A)は維持される。このモデルが正しければ、刺激呈示時に、一連の経験内容はいわば断片的にしか統一されていない。

Sモデルは機能主義のテーゼ(P=A)を放棄し、Oモデルはそれを維持する。他方、Oモデルは意識の統一について連合テーゼ(K)を放棄するが、Sモデルはそれを維持する。このように現象的統一は、表象主義のあるべき姿について重要な問いを投げかけることになる。表象主義と機能主義の相互補完的役割を維持したまま現象的統一を理解しようとするのなら、現象学的に自然な主張(K)は拒否されなければならない(Oモデル)。他方で、この現象学的主張を受け容れつつも、表象主義のもとで現象的統一を理解したいのであれば、機能主義を放棄しなければならない(Sモデル)<sup>\*21</sup>。

さらに、SモデルとOモデルの二者択一は、様々な経験的事例の解釈についても重要な含意をもたらす。最後に我々は、意識の(不)統一に関わるとされる経験的事例に触れながら、この点について簡潔に論じよう。それは分離脳の事例であり、SモデルとOモデルはこれにまつわる現象について異なる解釈を与える。

## 6.4 二つのモデルの含意——分離脳の場合

分離脳手術は、癲癇発作を防ぐ目的で脳梁という構造を離断するというものである。脳梁は、左右の大脳皮質間で投射する交連繊維の束であり、感覚情報を半球間で連絡する機能を持つとされる。分離脳手術が患者に与える影響は軽微であり、普段の生活には何の支障もないが、行動的な研究の結果から、分離脳の患者には特別な能力的障害があることが分かってきた。

一般に、左視野は右脳によって、右視野は左脳によって受容される。例えば、視野中央をまたいで

<sup>\*21</sup> 機能主義なしの表象主義の形態としては、例えば Chalmers(2004)を参照されたい。



「PEN KNIFE」という文字刺激を瞬間的に呈示すると、「PEN」は右脳に、「KNIFE」は左脳に受容される。左右大脳間での視覚情報連絡を障害されている分離脳患者に対してこのような刺激呈示を行うと、患者は「KNIFE」が見えたただけ言語的に報告する。これは、発話制御をなすのは一般に（「KNIFE」を受容する）左脳であるからだとされる。他方で患者は、その視覚刺激に一致する物体を左手で探り取るように教示されると、ペンを取り出し、ペンナイフやナイフを取り出すことはない。これは、左手の運動制御をなすのが（左視野の「PEN」を受容する）右脳であるからだとされる<sup>\*22</sup>。

問題は、このような実験下の患者の視覚経験が統一されていないように思われることである。患者の言語的な報告に基づく限り、彼は右視覚を独立した形で経験しているように思われる。だが、患者の左手の行動的な反応に基づく限り、彼は左視覚を独立した形で経験しているように思われる。すると患者の右視野と左視野は、ともに経験されていないのかもしれない。

OモデルとSモデルは、分離脳患者の現象的統一について異なる裁定を下す。機能主義を受け容れるOモデルによれば、分離脳患者の非統合的な行動は、その背景となるアクセス可能性の非統合に沿った現象的不統一を示している。すなわち、その左視野と右視野はともに経験されていない。さらにOモデルは、分離脳患者における部分的な現象的（不）統一を示すと思しき事例を受け容れることができる。例えば、脳梁を部分的に切断した場合、視覚情報の左右間連絡が障害されるが、触覚情報の連絡は保たれることがある。それゆえ、患者は左右の視覚情報の統合を要する行動を示さないものの、（例えば）右視野と触覚の統合を要する行動や、左視野と触覚の統合を要する行動は可能である（Gazzaniga & Freedman, 1973）<sup>\*23</sup>。それゆえどうやらこの患者では、左視野と触覚の連言が経験され、触覚と右視野の連言が経験されているが、左視野と触覚と右視野の連言は経験されていないように思われる。もしそうであれば、これはまさに（K）に対する反例に見え、Oモデルの観点からは容易に理解可能な事例である。

他方で機能主義を受け容れないSモデルによれば、分離脳患者の非統合的な行動は、必ずしも現象的な不統一を示すわけではない。脳梁を（全体的であろうが部分的であろうが）離断された患者は、行動・機能的な側面において何らかの不全を示すものの、それはアクセス可能性の障害を示すだけであり、現象的統一の障害を示すわけではない。それゆえ、実験下の分離脳患者と健常者の間には、現象学的な差異はないとする余地がある。こうして、（P=A）を否定する限り、分離脳患者の行動は（K）に対する反例とはならない<sup>\*24</sup>。

<sup>\*22</sup> なお、このような状況は実験的にのみ見られる。というのもどうやら、日常的な行動では眼球運動が許されているため、左右の視覚情報は両半球に受容されているらしいからだ。

<sup>\*23</sup> (1) この患者は、いわゆる分離脳患者に典型的に見られるように、右視野と左視野の連言を報告できない。例えば、両視野に呈示された刺激のうち、片方だけを報告する。それゆえ、右視野と左視野の連言は経験されていないと思われる。(2) さらに、右視野（左脳）に呈示された視覚刺激と一致する物体を右手（左脳）でとらせると、（当然ながら）これに成功する。それゆえ、右視野と右触覚の連言は経験されていると思われる。(3) だが興味深いことに、左視野（右脳）に呈示された視覚刺激と一致する物体を右手（左脳）でとらせると、これに成功する。それゆえ、左視野と右触覚の連言は経験されていると思われる。

<sup>\*24</sup> Oモデルが示唆するところは、Lockwood(1989)が主張する部分統一仮説に近い。Sモデルが示唆するところは、Bayne(2008)が分離脳患者について論じる完全統一仮説ないスイッチ仮説に近い。これらと他の仮説の比較検討は他所にて行いたい。

一方でOモデルはオーバーフロー問題への対処において断片的な統一を結論する点で不自然であり、他方でSモデルは(K)を維持する点で自然な考えである。だが分離脳を考慮に入れるとき、これらのモデルの自然さは逆転する。一方でOモデルは、分離脳患者の非統合的な行動は現象的な不統一を反映するという、率直な説明を与える。他方でSモデルは、患者の非統合的な行動にもかかわらず、その現象的統一は健常者のそれと変わらないとする余地を残す。

## 7 結論

経験(の内容)を通じた現象的統一は、それらをともに持つとはどのようなことかという観点から特徴づけられる。我々は、経験そのものと経験内容の区別に基づく表象主義的な考えを徹底し、経験そのものの(非)複合性あるいは個別化に関わる主張はどれも決定的ではなく、それはむしろ科学的探求に委ねられるべき問題だと提案した。最後に我々は、表象主義のもとでは、現象的統一に関する自然な現象学的主張が機能主義と両立不可能であることを論じ、その帰結として得られる二つの可能なモデルを提示した。これらのモデルは、分離脳をはじめとする経験的事例の理解について無視できない含意を持つ。これらのモデルのうちどちらが適切であるかは、関連する様々な事例を考慮に入れながら精密に検討する必要がある、今後の研究課題としたい。

## 謝辞

二人の匿名査読者ならびに編集委員より有益な助言をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

## 参考文献

- [1] Baars, B. J. 1988. *A Cognitive Theory of Consciousness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [2] Bayne, T. 2005. Divided brains and unified phenomenology: An essay on Michael Tye's "Consciousness and Persons". *Philosophical Psychology*, 18: 495-512.
- [3] ———. 2008. The unity of consciousness and the split-brain syndrome. *The Journal of Philosophy*, 105: 277-300.
- [4] Bayne, T., and Chalmers, D. (2003). What is the unity of consciousness? In A. Cleeremans ed. *The Unity of Consciousness: Binding, Integration, and Dissociation* (pp. 23-58). New York: Oxford University Press.
- [5] Block, N. 1995. On a confusion about a function of consciousness. *Behavioral and Brain Sciences*, 18(2): 227-87.
- [6] ———. 2001. Paradox and cross-purposes in recent work on consciousness. *Cognition*, 79(1-2): 197-220.

- [7] ———. 2007a. Consciousness, accessibility, and the mesh between psychology and neuroscience. *Behavioral and Brain Sciences*, 30(5-6): 481-99.
- [8] ———. 2007b. Overflow, access and attention. *Behavioral and Brain Sciences*, 30(5-6): 530-42.
- [9] Byrne, A. 2001. Intentionalism defended. *Philosophical Review*, 110: 199–240.
- [10] Carnap, R. 1967. *The Logical Structure of the World and Pseudoproblems in Philosophy*. Berkeley: University of California Press.
- [11] Chalmers, D. 1997. Availability: The cognitive basis of experience. *Behavioral and Brain Sciences*, 20(1): 148–9.
- [12] ———. 2004. The representational character of experience. In B. Leiter, ed. *The Future for Philosophy* (pp. 153-81). Oxford University Press.
- [13] Dainton, B. 2000. *Stream of Consciousness: Unity and Continuity in Conscious Experience*. New York: Routledge. (2006, Second Edition).
- [14] Dehaene, S. and Naccache, L. 2001. Towards a cognitive neuroscience of consciousness: Basic evidence and a workspace framework. *Cognition*, 79: 1–37.
- [15] Dennett, D. 2001. Are we explaining consciousness yet? *Cognition*, 79: 221-37.
- [16] Dretske, F. 1995. *Naturalizing the Mind*. Cambridge, MA: MIT Press / Bradford Books. [邦訳:『心を自然化する』 鈴木貴之訳, 勁草書房, 2007]
- [17] Gazzaniga, M. S. and Freedman, H. 1973. Observations on visual processes after posterior callosal section. *Neurology*, 23: 1126-30.
- [18] Harman, G. 1990. The intrinsic quality of experience. In J. Tomberlin, ed. *Philosophical Perspectives, 4: Action Theory and Philosophy of Mind* (pp. 31-52). Ridgeview Publishing.
- [19] Kobes, B. 2005. The “one-experience” account of phenomenal unity: A review of Michael Tye’s “Consciousness and Persons”, *Psyche*, 11. <http://www.theassc.org/files/assc/2607.pdf>.
- [20] Kouider, S., de Gardelle, V. and Dupoux, E. 2007. Partial awareness and the illusion of phenomenal consciousness. *Behavioral and Brain Sciences*, 30(5-6): 510-1.
- [21] Lockwood, M. 1989. *Mind, Brain & the Quantum*. Oxford: Basil Blackwell. [邦訳:『心身問題と量子力学』奥田栄訳, 産業図書, 1992]
- [22] Lycan, W. G. 1996. *Consciousness and Experience*. Cambridge, MA: MIT Press.
- [23] Naccache, L. and Dehaene, S. 2007. Reportability and illusions of phenomenality in the light of the global neuronal workspace model. *Behavioral and Brain Sciences*, 30(5-6): 518-20.
- [24] Nagel, T. 1974. What is it like to be a bat? *Philosophical Review*, 83: 435-50. [邦訳:『コウモリであるとはどのようなことか』 永井均訳 所収, 勁草書房, 1989]
- [25] Papineau, D. 2007. Reuniting (scene) phenomenology with (scene) access. *Behavioral and Brain Sciences*, 30(5-6): 521.
- [26] Rosenthal, D. 1986. Two concepts of consciousness. *Philosophical Studies*, 49(3): 329-59.

- [27] Sperling, G. 1960. The information available in brief visual presentations. *Psychological Monographs: General and Applied*, 74(11, Whole No. 498): 1-29.
- [28] Tye, M. 1995. *Ten Problems of Consciousness*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- [29] ———. 2003. *Consciousness and Persons: Unity and Identity*. Cambridge, MA: The MIT Press.

## 著者情報

太田紘史(東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員 PD)

佐金武(大阪大学大学院人間科学研究科・日本学術振興会特別研究員 PD)